

春はここから

池田 真也

◎ 駅のホーム

黎一(20)の旅立ちの日。幼なじみの千晶(20)が駅まで見送りに来ている。

千晶 「いよいよ、いっちゃうんだね。今度こっちに帰って来たときはさ、すつごく有名になってて、私なんて相手にされなかったりしてね」

黎一 「俺はいつまでも俺のままだよ。それよりお前の方が変わってるんじゃないのか」

千晶 「案外そうだったりして。向こうでいいパートナーが見つかるといいね」

黎一 「そうだな」

千晶 「東京か、いいな。早くデビューしてよね。するんだろうな。CD出して、テレビや雑誌に出て、満員の会場でライブやって」

黎一 「そんなに簡単に行くか」

千晶 「行くわよ。だってレコード会社から声がかかってるんでしょ」

黎一 「話を聞いてやってもいいって言うてるだけさ。どうなるかわかんないよ」

千晶 「黎一なら絶対成功するわ。だって才能あるもの。私、黎一の作る曲大好きだよ。乗りもいいのによく聞くと優しくくて」

黎一「それは嬉しいね」

千晶「武志も言ってたわ。あいつは天才だって。あんな曲俺には作れないって」

黎一「・・・そう。」

千晶「わたし友達に自慢するからね。それを今から楽しみにしてるんだ。あいつ昔はあんなふうだったって」

黎一「余計なこと言うなよ」

千晶「安心して。いい奴だよっていつてあげるから」

黎一「・・・いい奴ねえ。あいつはだんなの親友だったって言ってやんなよ」

千晶「(てれ笑いしながら)なによ。それ」

黎一「お前らきつとうまくいくさ。傍から見ててそう思うよ」

千晶「・・・そうかな」

黎一「うまくいってもらわなくちゃ。俺の親切が水の泡だぜ」

千晶「あのころはさ、動いてもらったよね。いろいろ場を作ってくれたりして。あいつとの初めてのデートの事覚えてる?」

黎一「覚えてるよ」

千晶「最初3人で遊びに行くはずだったのに、あんた来なくてさ。

あのとき本当にあせったんだよ。そこまで頼んでないって。どうし

ていいかわからなかったんだから」

黎一「でもたくさん話ができたんだろ」

千晶「うん。感謝してる」

黎一「お前の喜ぶ顔がみたかったのさ」

千晶「・・・」

黎一「(大きな声で)なんてね。あれからずっとあとでさ、武志に』お前らグルだったんだろ』って言われたから』そうだよ。グルだったんだよ』って言ってやったよ」

二人笑う。

千晶「バンドの連中来ないね」

黎一「みんな働いてんだぜ。平日の昼間にこんなところにいられる奴なんてさ、暇な短大生と風太郎ぐらいのもんだよ」

千晶「向こうに行くの日曜にすればよかったのに。なんでそうしないのよ」

黎一「大袈裟なのは好きじゃないよ。ひっそりと消えたかったのさ・・・ってね」

千晶「シャイなんだから」

黎一「分かったふうに言うなよ」

千晶「あんたのことなら大抵のことはわかってるわ。(いたずらっぽ

く)小さい時は一緒にお風呂に入ったんだし」

黎一「お前女のくせにそういうことよく言うな。恥ずかしくないのかよ」

千晶「なに照れてんのよ。(笑いながら)あんたそういうところかわいいね。ハハハ」

黎一「うるせえ」

千晶「それにしてもさ、武志がこないのはおかしいね」

黎一「来ねえよ」

千晶「なに言ってるんのよ。あんたたち親友でしょ」

黎一「忙しいんだろ」

千晶「来るわよ。どうせ仕事も暇だから来るっていったんだけどな」

黎一「来ねえよ。：俺たちケンカしたんだ」

千晶「バカねえ。あんたたち。なにもこんな、離ればなれになるっていう時にケンカしなくてもいいじゃない。原因は何よ」

黎一「あいつが『粹がってる』って言って俺が『ひがんでる』って言うて：：だから来ねえんだよ」

千晶「本当にバカなんだから。あんたたちいいコンビだったじゃない。もう：：いつケンカしたのよ」

黎一「おとといかな。あいつなにも言わなかったのかよ」

千晶「うん。言わなかった。でもすぐ落ち込んだよ。あんたがいなくなるから寂しいのかなって思って、私黙ってたんだけどね」

黎一「そういうわけだよ」

千晶「・・・あいつあんたに嫉妬してるのよ。黎一はすごい。あいつにはかなわないっていつも言ってたもん」

黎一、静かに笑う。

千晶「どうしたの」

黎一「・・・別に。俺に嫉妬してんのか。わらっちゃうな」

千晶「そうよ。武志はあんたがいたからプロになるの諦めたのよ。・・・それがあいつには良かったんだけどね」

黎一「あいつ、このまま家継ぐのかな」

千晶「継ぐんじゃない。本人はいつか出てやるって言ってるけどさ。

あいつはここから出られないわよ。黎一とは違うもの」

黎一「・・・そっか」

千晶「でもあいつ、黎一のことを心から応援してるわ。それだけは信じてあげて。あんたが音楽で成功したら、一番喜ぶのは、あいつだと思う」

黎一「ああ」

千晶「ねえ黎一、仲直りして。お願いだから。あいつ自分から謝らないと思うけどさ、今頃きつと後悔してるわ。あんな顔してて根はすごくナイーブなんだから」

黎一「わかってるさ。武志のことは俺が一番よく知ってる」

千晶「約束して。向こうについたらすぐにあいつに連絡するって」

黎一「わかったよ」

千晶「本当に約束だよ」

千晶、小指を出す。

黎一、彼女の指を見つめる。千晶の指。白い指。黎一も小指を出し、静かにそれに触れる。

千晶、小指で黎一の小指をつかみしっかりと握る。

千晶「絶対だよ。」

黎一「わかったよ。むこうについたら真っ先にあいつに電話するか。約束するよ」

千晶、指の力を緩める。

黎一の指は千晶の指に引っ張られるが、静かに離れて行く。

千晶、ほほ笑む。

黎一「本当にお前ら、うまく行くよ」

千晶「あんたはどうなのよ。いるんでしょ。好きな人」

黎一「いねえよ。そんなもん」

千晶「うそ。いるわよ」

黎一「なんでだよ」

千晶「コーガンズの最後のライブの時の黎一って、舞台から誰かに訴えてる感じだった。前から黎一ってすごいと思ってたけれど、あの時の黎一って特別だったよ。こっちまで伝わってきたもの。本当は来てたんでしょ。あんたの好きな娘」

黎一「そんなこと、どうでもいいだろ」

千晶「ずるい。私はなんでもあんたに話してるのに」

黎一「お前が勝手に話したんだろ」

千晶「ねえ、いいじゃない。私の知ってる娘？」

黎一「…ああ」

千晶「え。誰？」

黎一「誰でもいいだろ」

千晶「その娘に好きだっていったの」

黎一「いや」

千晶「なんでよ？」

黎一「いいんだよ」

千晶「あの歌全部その娘のために書いたんでしょ。そんなに好き



だったら言えればいいじゃない」

黎一「関係ないだろ」

千晶「あなた卑怯よ。いつだって孤独を気取りながら、本当は逃げてるんだわ」

黎一「だまれ」

千晶「だまらないわ。傷つくのが怖いよ。プライドが高すぎるから」

黎一「そんなんじゃない」

千晶「そうよ。傷ついたら、傷ついたのでいいじゃない。物を作るんだったら、そういうことが必要になってくるわ」

黎一「ごちゃごちゃうるせえな」

俺が本当に好きなのはな……」

その時、特急列車が大きな音をたてて通過する。黎一の声

はかき消される。

千晶「…今、なんて言った？」

黎一「…いや。喧嘩はやめようぜって言ったんだ。最後ぐらいさ、

気持ち良く別れようよ」

千晶「…そうだね。ごめんなさい。私すぐに熱くなっちゃうから」

黎一「気にすんなよ」

千晶 「でも私ずっとあなたのこと見守ってるからね。本当だよ」

黎一 「わかってる……わかってるよ(ほほ笑む)」千晶 「……」

黎一 「(黎一、何かに気づく)あ……」

武志が歩いて来た。千晶もそれに気づく。

千晶 「何してんのよ。遅いじゃない」

武志、黎一に近づく。

武志 「……いよいよ行くんだな」

黎一 「……ああ」

ふたりは何となく気まずい。

場内アナウンス。まもなく列車が到着します

武志 「……東京か」

黎一 「……東京だよ」

武志 「……頑張れよな」

黎一 「……頑張るよ。……ほんとに有り難う」

武志 「……悪かったな。俺が悪かった」

黎一 「いや」

列車が入線してくる。扉が開き黎一は乗る。

千晶 「じゃあね。元気で」

黎一 「さようなら」

千晶が右手を差し出し、黎一はそれを強く握る。

黎一はその右手を武志に差し出す。

黎一「武志」

武志はその右手を強く握る。

黎一「…俺さ、実を言うはずとお前に嫉妬してたんだ。お前は俺がもっていないものを持っている」

武志「何、言ってるんだよ」

武志ほほ笑む。黎一もほほ笑む。

それを見ていた千晶もほほ笑む。

ドアが閉まる。列車は発車する。出発進行

ホームに残された武志と千晶

千晶「なにやってんのよ…もう来ないかと思った」

武志「来るつもりじゃなかったんだけど」

千晶「もう…(呆れて)ふたりともバカなんだから」

武志「黎一は気が弱いところからな。帰る場所を残しておく、本当に帰ってきちまう」

千晶「…」

武志「あいつは一度ひとりになったほうがいいんだ。甘えた性格のままだと力を発揮できないよ」

千晶 「・・・成功するかな」

武志 「するさ。あいつは俺たちとは違う生き物なんだ。」

千晶 「ほんとに成功するといいな」

武志 「するさ・・・きつとするな」

終わり